

第4節 弥生時代の調査成果

1 概要(第30図)

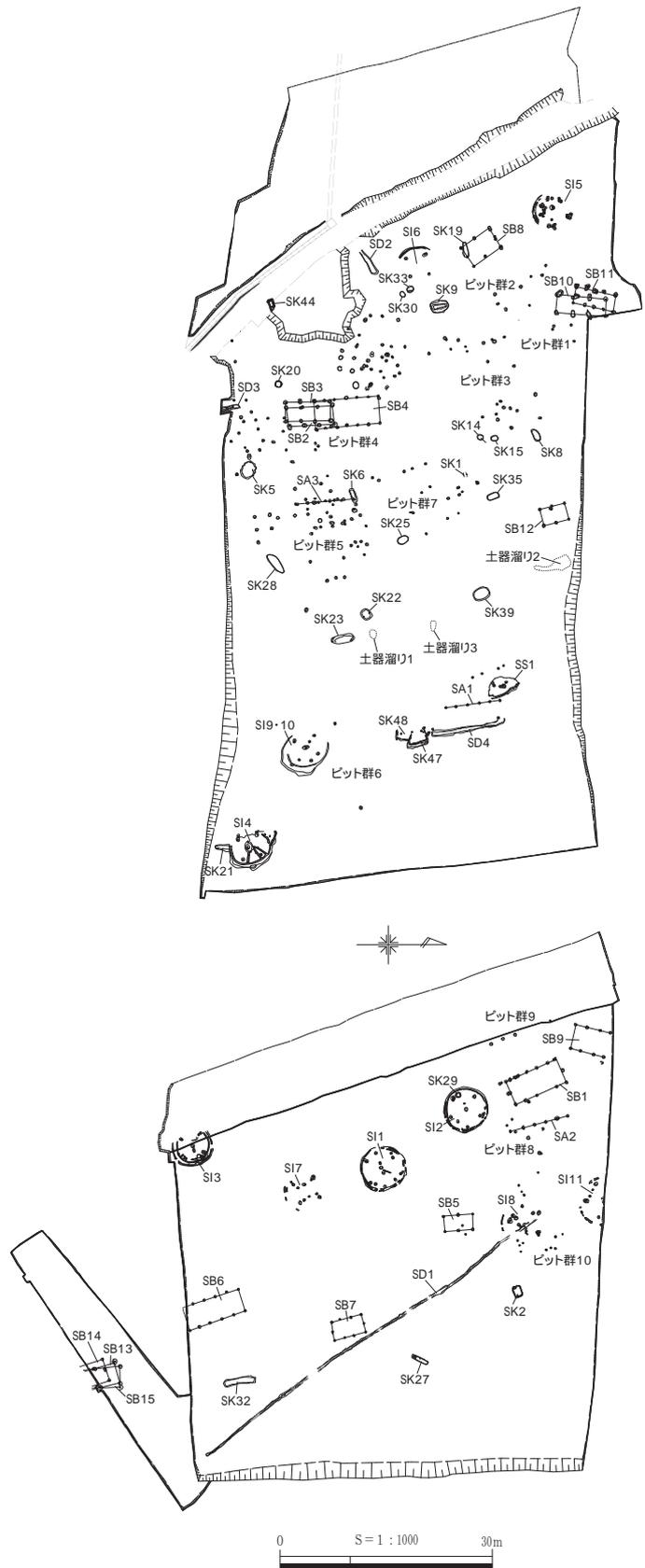
弥生時代が本遺跡で最も繁栄する時期で、  
 竪穴建物跡11基(SI 1 ~ 11)、掘立柱建物跡  
 15基(SB 1 ~ 15)、貯蔵穴と考えられる土坑  
 2基(SK20・29)、土壇墓・木棺墓3基(SK 9・  
 19・44)、その他土坑20基(SK 1・2・5・6・  
 8・14・15・21・22・23・25・27・28・30・  
 32・33・35・39・47・48)、溝4基(SD 1 ~ 4)、  
 段状遺構1基(SS 1)、柵列3基(SA 1 ~ 3)、  
 ピット群13箇所、土器溜り3箇所(土器溜り  
 1 ~ 3)を検出した。これらは、概ね弥生時  
 代中期中葉(清水編年 - 3様式)から中期後  
 葉(清水編年 - 3様式)にかけて断続的に営  
 まれている。

このうち、竪穴建物跡はすべて竪穴住居跡  
 と考えられ、SI 3・9は焼失住居で良好な状  
 態で炭化材等が出土した。

また、出土遺物としては煮炊具・貯蔵用の  
 土器類のほか、祭祀用と考えられる土器や分  
 銅形土製品、伐採用の太型蛤刃石斧、漁労用  
 と考えられる石錘、石器を研いだと思われる  
 砥石、敲石など生活全般に使用した遺物が多  
 種多量に出土している。しかし、鉄器はわず  
 かしか出土しておらず、本遺跡では鉄器の使  
 用は未だ一般化していない状況が窺われる。

当遺跡では、竪穴住居、倉庫、墓、貯蔵施  
 設、祭祀関連遺構及び生活必需品がまとめて  
 出土していることから、当時の集落様式を  
 考える上で良好な遺跡である。

この時期の集落は、さらに遺跡周辺に広  
 がっているものと考えられる。



第30図 弥生時代遺構分布図

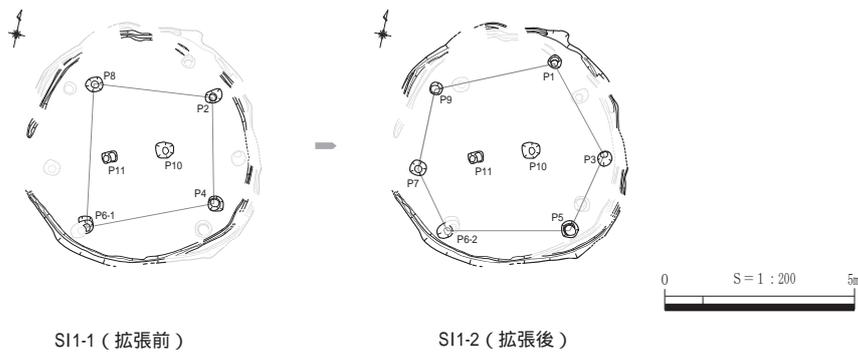
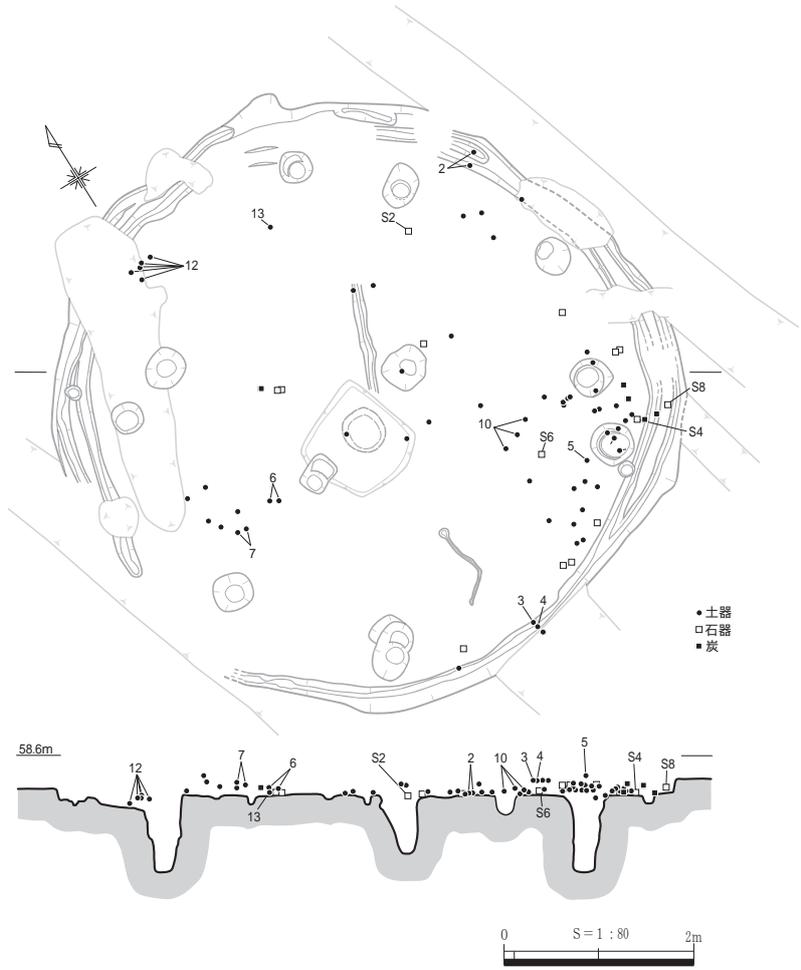
2 竪穴建物跡

SI 1(第31 ~ 33図、表1、PL.11・12・48・82・83・85)

1区中央から東寄りのD 5・D 6・E 5・E 6グリッドにあり、標高58.0 ~ 58.5m付近の上部平坦面に立地する竪穴住居跡である。北西側約8 mにはSI 2が、南側約6 mにはSI 7がある。梨畑として



- 1 暗褐色土 (10YR3/3)
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) ロームブロック・炭化粒を含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) ローム細粒を含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) ロームブロックを含む
- 5 黒褐色土 (10YR2/3)
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 5mm程のロームブロックを含む
- 7 黒褐色土 (10YR3/2)
- 8 黒褐色土 (10YR3/1) ローム細粒を含む
- 9 黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロックを含む
- 10 極暗褐色土 (7.5YR2/3) ローム粒を含む
- 11 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、ローム細粒を含む
- 12 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒を含む
- 13 極暗褐色土 (7.5YR2/3) ロームブロックを含む
- 14 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒を多く含む
- 15 黒褐色土 (10YR3/1)
- 16 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒を含む
- 17 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒を含む
- 18 暗褐色土 (10YR3/3) ローム細粒を多く含む
- 19 黄褐色土 (10YR5/6)
- 20 黄褐色土 (10YR5/8)
- 21 黒色土 (10YR2/1)
- 22 黒色土 (10YR2/1) ロームブロックを含む
- 23 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
- 24 黒褐色土 (10YR2/2)
- 25 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
- 26 黒褐色土 (10YR2/3) ローム細粒を含む
- 27 黒色土 (10YR2/1) ローム細粒を含む
- 28 黒褐色土 (10YR3/2) にぶい黄褐色土 (10YR5/4) が混じる
- 29 黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒を含む
- 30 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
- 31 黒褐色土 (10YR3/2) にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混じる
- 32 黒褐色土 (10YR3/2) にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混じる、粘性やや強
- 33 黒褐色土 (10YR3/1) にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混じる
- 34 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ロームブロックを含む
- 35 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性強
- 36 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒を含む
- 37 黒色土 (10YR2/1) ローム粒を含む
- 38 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒を多く含む
- 39 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒を含む
- 40 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒をわずかに含む
- 41 黒褐色土 (10YR2/2)
- 42 黒褐色土 (10YR3/3) ローム細粒を含む
- 43 黒褐色土 (10YR3/3) ロームブロックを含む
- 44 黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロックを含む
- 45 黒褐色土 (10YR3/2) ローム細粒を含む
- 46 黒褐色土 (10YR3/1) にぶい黄褐色土 (10YR6/3) の混濁土
- 47 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 48 暗褐色土 (10YR3/3)
- 49 カクラン
- 50 明黄褐色土 (10YR6/6) と黒褐色土 (10YR3/1) の混濁土
- 51 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) と黒褐色土 (10YR3/1) の混濁土
- 52 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
- 53 黒褐色土 (10YR2/3)
- 54 暗褐色土 (10YR3/4)
- 55 褐色土 (10YR4/4) ロームブロックを含む

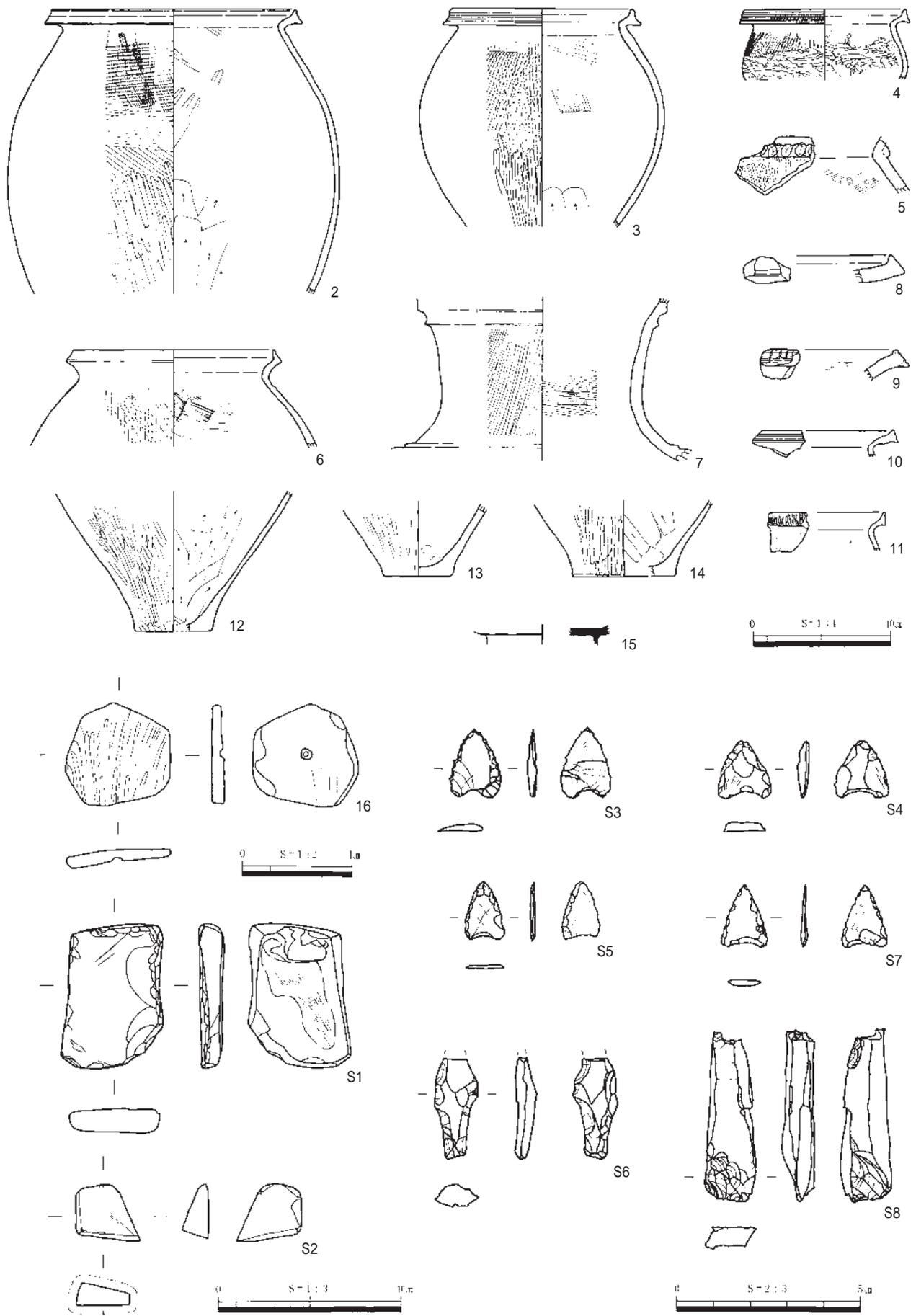


第32図 SI 1(2)

土地利用された際に削平されており、表土除去後のソフトローム層で検出した。住居跡の周囲および住居内は、施肥溝などにより攪乱を受けており、壁はわずかに南東側と南側の一部を残すのみであった。平成21年度確認調査のTr.11で検出されたSI 1である。

平面は円形を呈しており、径6.6m、表面積34.2㎡を測り、南側の壁上面から床面までの深さは24cmとなる。壁溝は、住居跡の東半分と北西部分で内外2条となるほかは、1条のみとなっており、部分的な住居跡の拡張をおこなったと考えられる。壁溝の規模は、幅10～20cm程度、深さ7～8cmを測る。

主柱穴に該当すると考えられるのは、P 6 が2つの柱穴が結合したものであることを踏まえると、



第33図 SI 1 出土遺物

P1～P9(P6はP6-1、P6-2)の10基であると考えられる。柱穴配置を復元すると、内側から1次(SI1-1)および2次(SI1-2)の建物が復元でき、1回以上の建て替えが考えられる。SI1-1は、主柱穴がP2・P4・P6-1・P8と不整な方形の配置となる。また、2次建物のSI1-2は6本柱の建物で、P1・P3・P5・P6-2・P7・P9と不整な六角形の配置となる。

主柱穴間距離は、SI1-1では、P2-P4間から時計回りの順に、2.8m、3.4m、3.8m、3.1mとなり、SI1-2は、P1-P3間から順に、

2.8m、2.2m、3.2m、1.8m、2.2m、3.2mとなる。主柱穴の規模は、比較的残りのいいP1・P3～P5・P7・P8で、径35～45cm程度、深さ65～85cm程度を測る。

主柱穴のほかに、P10とP11があるが、住居跡の中央付近に対照的に配置されており、棟持柱の可能性が考えられる。P10の径42～46cm、深さ60cmを測る。

なお、住居跡の中央やや北寄りの床面では、焼土面を検出している。

埋土は、しまり・粘性の弱い、暗褐色土(1層)または黒褐色土(2・3層)からなる3層を主体とするが、大部分で攪乱を受けているものと考えられる。主柱穴の埋土は、いずれも黒色土または黒褐色土を主体としている。P6では、P6-1をしまり・粘性の強い黄褐色土または暗褐色土で埋めた後、再度掘削してP6-2を掘り込んだと考えられる。また、P3の3・7層、P5の29層、P6-2の16層、P7の38層、P9の3層がそれぞれ柱痕と考えられ、それぞれの柱の径は18cm、26cm、26cm、26cm、24cmに復元できる。

遺物は、埋土中および床面直上を中心に、弥生土器や土製品、石器等が出土した。床面から甕底部片12が出土した他は、図化したものはいずれも埋土中から出土した。2～6・8・10～14は甕、7・9は壺である。なお、平成21年度の確認調査時にも、床面直上から弥生土器の甕が出土している。16は土製紡錘車で、壺または甕の胴部片を再利用して製作されたものである。15は攪乱土中から出土した須恵器坏である。

S1～S8は石器である。S1はP8から出土した磨石、S5はP10の埋土中から出土した安山岩製の石鏃である。その他はいずれも埋土中から出土したもので、S2は砥石、S3～S5・S7は安山岩製の石鏃、S6は石錐、S8はクサビ形石器削片である。

出土土器はいずれも清水編年 - 2・3様式に相当することから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

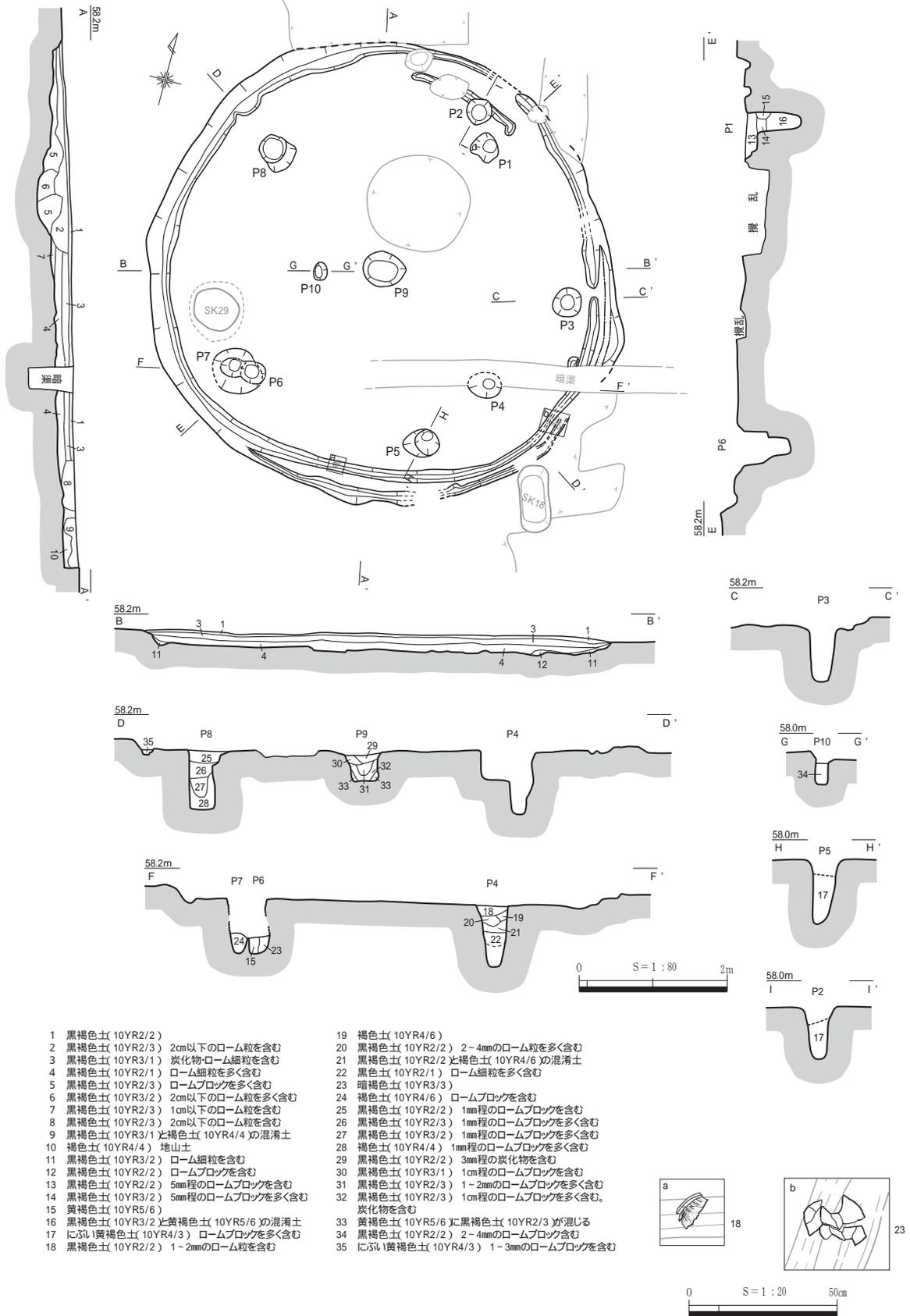
SI2(第34～36図、表2、PL.13・14・49・82・85・86)

1区北西寄りのC6・C7・D6・D7グリッドにあり、標高58.0m付近の台地上平坦面に立地する竪穴住居跡である。南東側約8mにはSI1が、北側約4mにはSB1がある。梨畑の際に削平されており、表土除去後のソフトローム層で検出した。住居跡のすぐ北側や住居内の南寄りでは東西に暗

表1 SI1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P1	35×33-66	
P2	46×33-55	
P3	39×37-72	柱痕跡有(径16cm)
P4	46×41-80	
P5	46×45-73	柱痕跡有(径14cm)
P6-1	35×23-60	
P6-2	41×37-66	柱痕跡有(径16cm)
P7	41×39-75	柱痕跡有(径16cm)
P8	46×38-74	
P9	33×33-62	柱痕跡有(径12cm)
P10	46×42-57	柱痕跡有(径15cm)
P11	39×28-60	柱痕跡有(径12cm)

第3章 調査の成果



第34図 SI2(1)

渠が走るほか、住居跡の周辺や住居内は施肥溝などにより攪乱を受けていた。そのため、住居跡の壁は、東寄りで比較的良好に残るものの、本来の面より削平された状況であった。

平面は円形を呈しており、径6.2m、表面積30.2m<sup>2</sup>を測り、東側の壁上面から床面までの深さは22cmとなる。壁溝は、住居跡の北側および南側の一部で内外2条となるほかは、1条のみであり、SI 1と同様、部分的に住居跡を拡張したものと考えられる。壁溝の規模は、幅10～20cm程度、深さ5～8cmを測る。

主柱穴に該当すると考えられるのはP 1～P 8であり、そのうちP 1とP 2、P 4とP 5、P 6とP 7は、建て替えの際に柱穴の位置をずらしたものと考えられることから、内側から1次(SI 2 - 1)と2次(SI 2 - 2)の建物が復元できる。SI 2 - 1は4本柱の建物で、主柱穴はP 1・P 4・P 6・P 8となる。SI 2 - 2は5本柱の建物で、主柱穴はP 2・P 3・P 5・P 7・P 8となる。

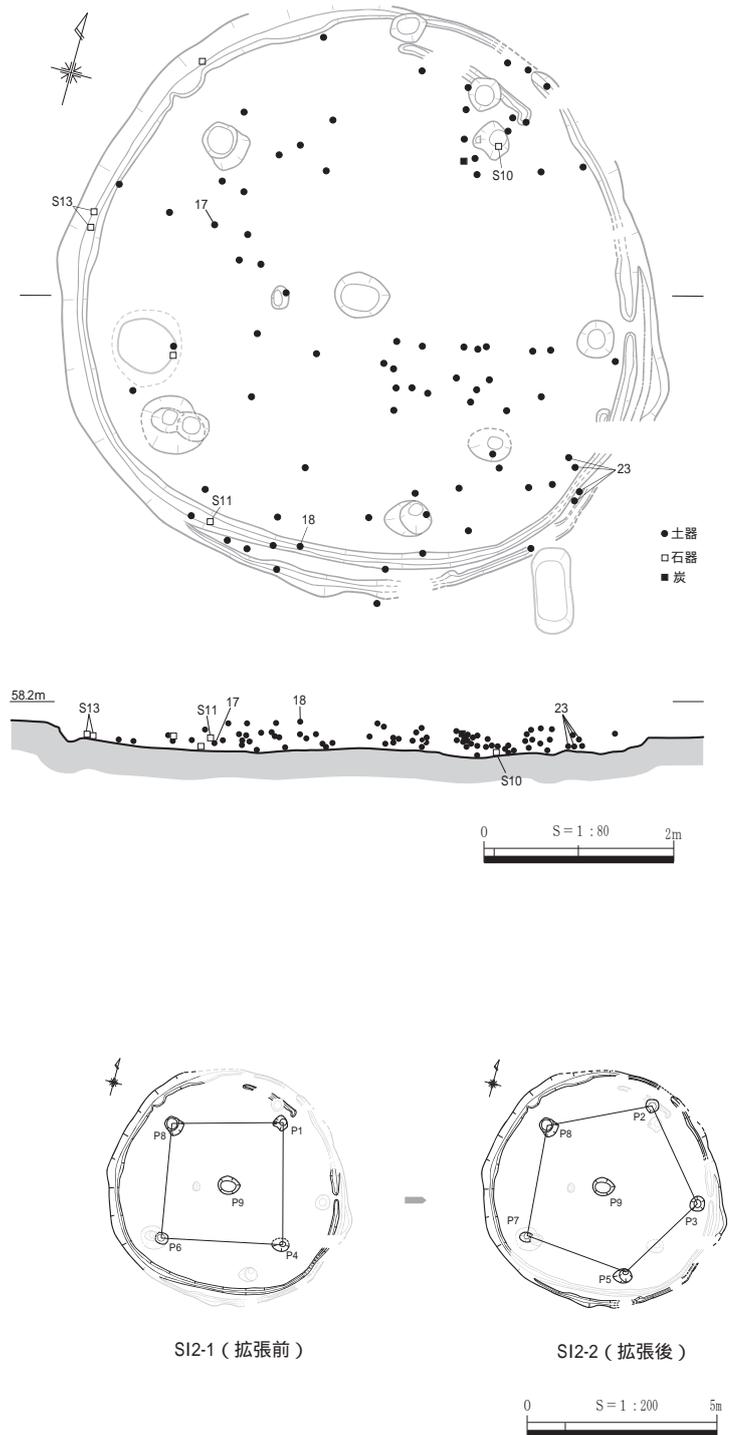
主柱穴間距離は、SI 2 - 1では、P 1 - P 4間から時計回りの順に、3.2m、3.2m、3.1m、2.9mとなる。SI 2 - 2では、P 2 - P 3間から順に、2.8m、2.7m、2.8m、3.0m、2.8mとなり、ほぼ等間隔となる。主柱穴の規模は、比較的残りのいいP 3・P 5・P 8で、径40cm程度、深さ75～85cm程度となる。主柱穴の埋土は、地山ソフト

ロームのブロックを含む黒褐色土や褐色土を主体とするが、P 2やP 5ではハードロームのブロックを多く含むにぶい黄褐色土が主体となる。また、P 6の15層、P 8の27層は柱痕と考えられる。

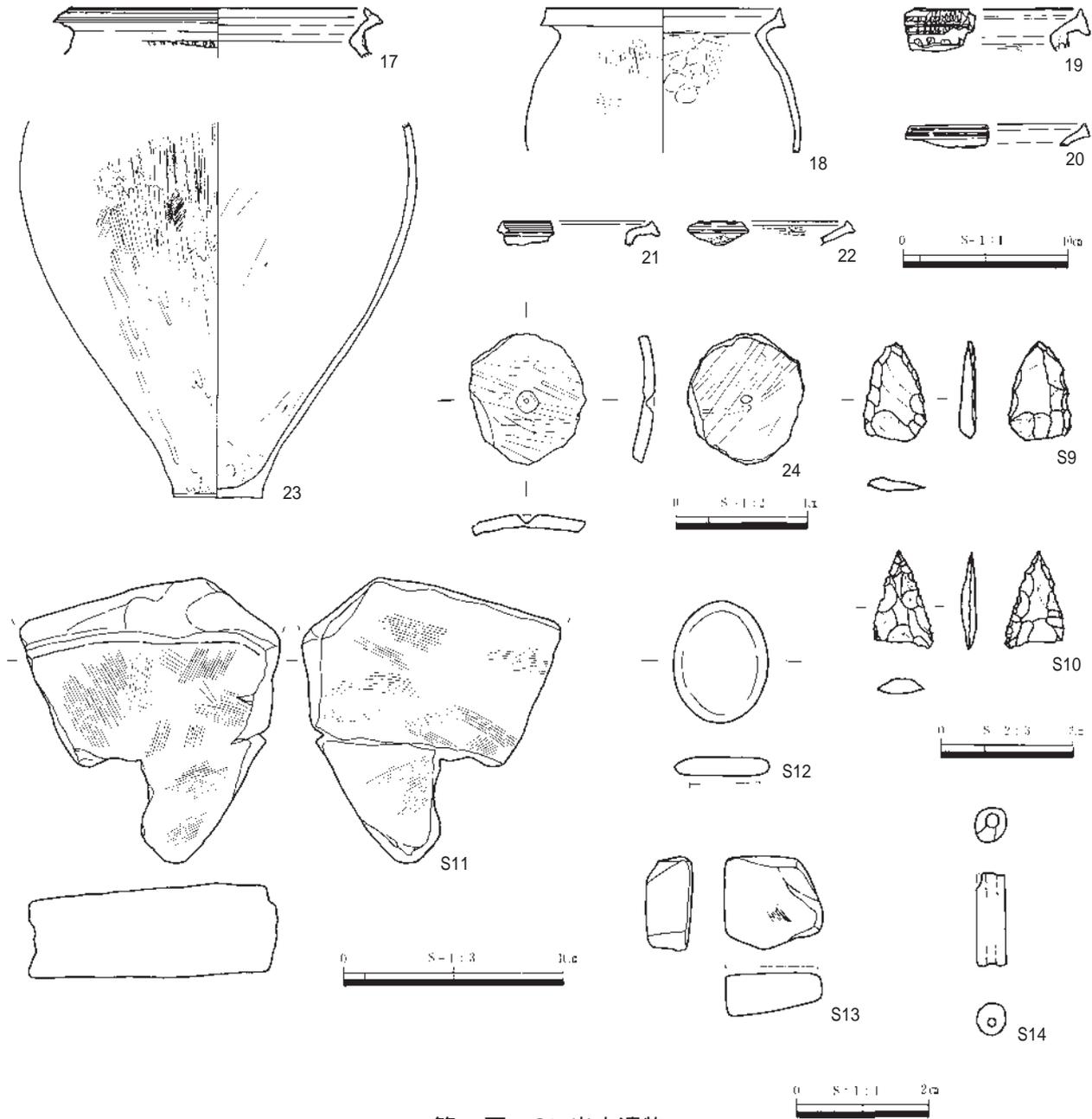
主柱穴のほかにP 9があり、中央ピットと考えられる。規模は径50～60cm程度、深さ38cmとなる。なお、住居内南西寄りの床面上で検出したSK29は、後述するように貯蔵穴と考えられる。

埋土は、しまり・粘性のやや弱い、3層の黒褐色土(1・3・4層)を主体とするが、大部分で攪乱を受けていた。

遺物は、埋土中から、弥生土器や土製品、石器等が出土した。17～22は、いずれも甕である。24



第35図 SI 2(2)



第36図 SI2出土遺物

は紡錘車で、壺または甕の胴部片を再利用したものである。

S 9 ~ S 13は石器である。S 9・S 10は安山岩製の石鏃、S 11・S 13は砥石、S 12は磨石である。

S 14は碧玉製の管玉未製品で、孔は貫通していない。S 14の石材は、後掲の自然科学分析の結果から、北陸・菩提産の可能性が指摘されている。

出土土器は、18・20 ~ 22が清水編年 - 2様式の可能性があるが、その他はいずれも清水編年 - 3様式に相当すると考えられ、遺構の時期は弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

表2 SI2ピット一覧表

ピット番号	規模 長軸×短軸・深さ cm	備考
P 1	42×38 - 75	
P 2	36×36 - 71	
P 3	40×39 - 75	
P 4	46×36 - 85	
P 5	50×39 - 87	
P 6	34×30 - 76	柱痕跡有(径14cm)
P 7	29×27 - 75	
P 8	50×38 - 81	柱痕跡有(径20cm)
P 9	59×50 - 37	柱痕跡有(径16cm)
P 10	26×19 - 41	

SI3(第37～39図、表3、PL.15～17・49・82・85・86)

1区南西隅のG5・G6・H5・H6グリッドにあり、標高約59.0m付近の上部平坦面に立地する竪穴住居跡である。梨畑として土地利用された際に削平されており、表土除去後のホーキ層上面で検出した。住居跡の中央に東西方向に暗渠が設けられていたほか、施肥溝などによる攪乱のため壁溝の大部分は壊されていたが、南西部分の壁溝はよく残っていた。また住居跡の西半分は、平成23年度に調査を行ったところ、町道建設時に大きく掘削を受けていることが判明した。

平面は円形を呈すると推定される。内側と外側に2条の壁溝を検出した。外側の壁溝における最大径5.7m、表面積は推定25.5㎡を測り、内側での最大径4.8m、表面積は推定18.1㎡を測る。南西部分の壁上面から床面までの深さは約20cmである。内側の壁溝の幅25～38cm、外側の幅24～58cmであり、深さ4～9cmを測る。

主柱穴と考えられるもののうち、P1・P2・P6はいずれも2本の柱穴が重複したものとみられる。そして、後述するように、埋土の切り合い関係より、内側の柱穴を埋め戻して、新たに建て替える時に掘削したものと考えられることから、P1のうち、埋没順序の古い方をP1-1、新しい方をP1-2とし、同様にP2は、P2-1、P2-2の順で、P6は、P6-1、P6-2の順で埋没したものと考える。よって、1次建物(SI3-1)となるのがP1-1・P2-1・P6-1・P7の組合せで、2次建物(SI3-2)となるのがP1-2・P2-2・P6-2・P8の組合せとなり、いずれも4本柱の建物になると考えられ、SI3-1の後にSI3-2が造られたものと考えられる。

主柱穴間距離は、SI3-1は、P1-1とP2-1間から時計回りの順に2.8m、2.7m、2.5m、2.5mを測り、SI3-2は、P1-2とP2-2間から順に3.1m、2.9m、2.9m、2.8mを測る。主柱穴の径は30～50cm程度であり、SI3-1における深さはP1-1で77cm、P2-1で68cmとなる。

P4は中央ピットと考えられ、P5もそれと関係する可能性がある。P4の平面形は円形で、径45cm、深さ38cmを測り、P5の平面形は長楕円形で、主軸長54cm、深さ15cmを測る。

また、P4とP7の間に土坑(SI3SK1)がある。西側は道路工事により大きく掘削されており全形は不明であるが、長軸1.0m以上、短軸30cm以上、深さ20cmを測る。埋土は、2層に分層できたが、6層は住居下層の埋土と同様、炭化物、焼土を含む層であり、廃絶時には開放状態であったと考えられる。用途は不明である。

住居跡の床面および埋土中からは、焼土塊と炭化材が出土した。焼土塊は、住居跡の中央付近と調査区西壁際で出土しており、盛り上がった状態であり、屋根の覆土と考えられる。炭化材の残りはよくないものの、中央付近で、壁から中央に向かう比較的大きな材が出土しており、屋根の垂木材と考えられる。

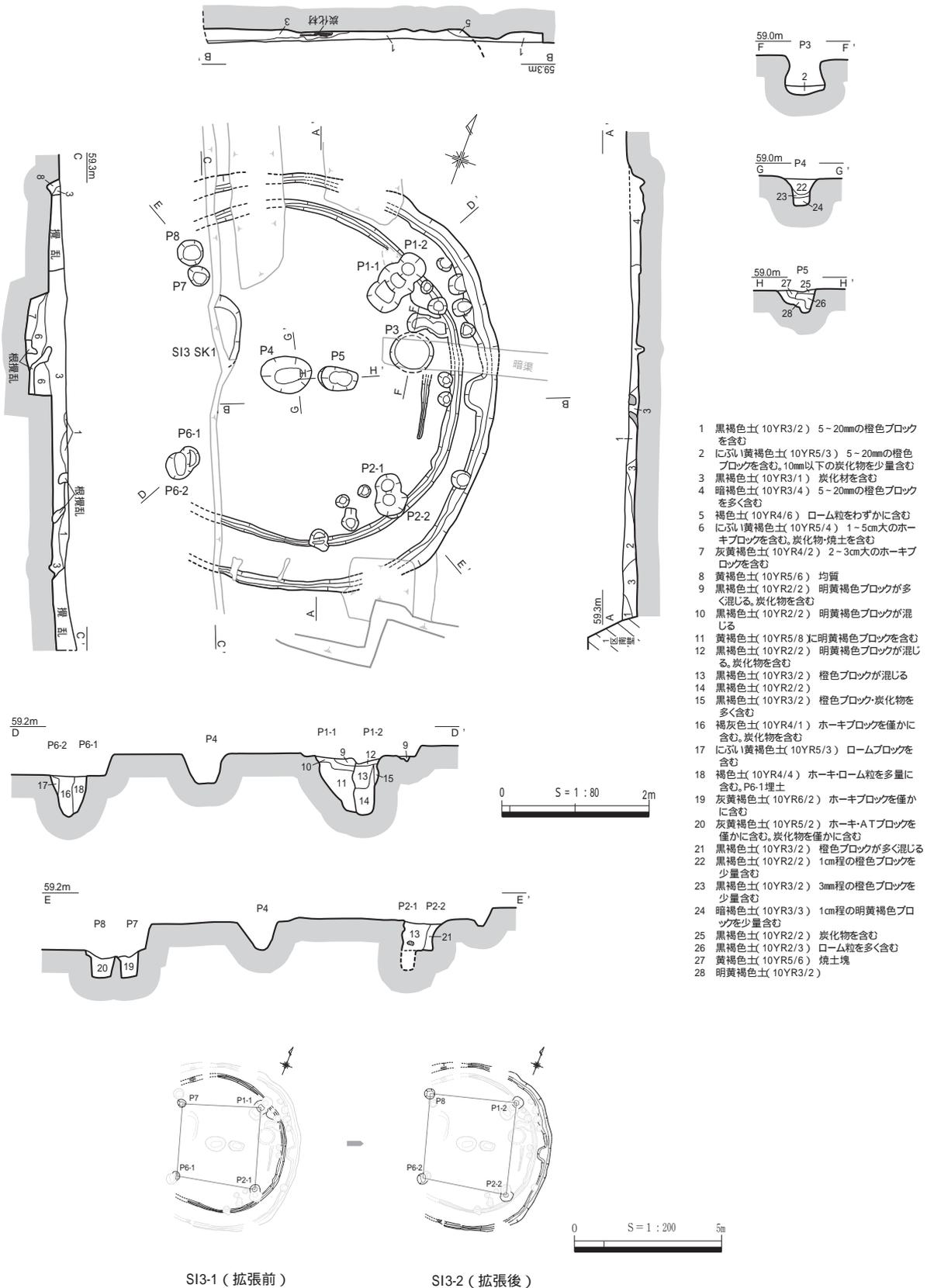
また、後掲の樹種同定の結果、炭化材には、広葉樹(クリ・スダジイ・ヤマグワ・モクレン属・クスノキ科)9点と針葉樹(ヒノキ)1点が確認されており、そのうち垂木材と推定できるものに、クリ1点(No.260)がある。

埋土は5層に分けられるが、大部分は、しまり・

表3 SI3ピット一覧表

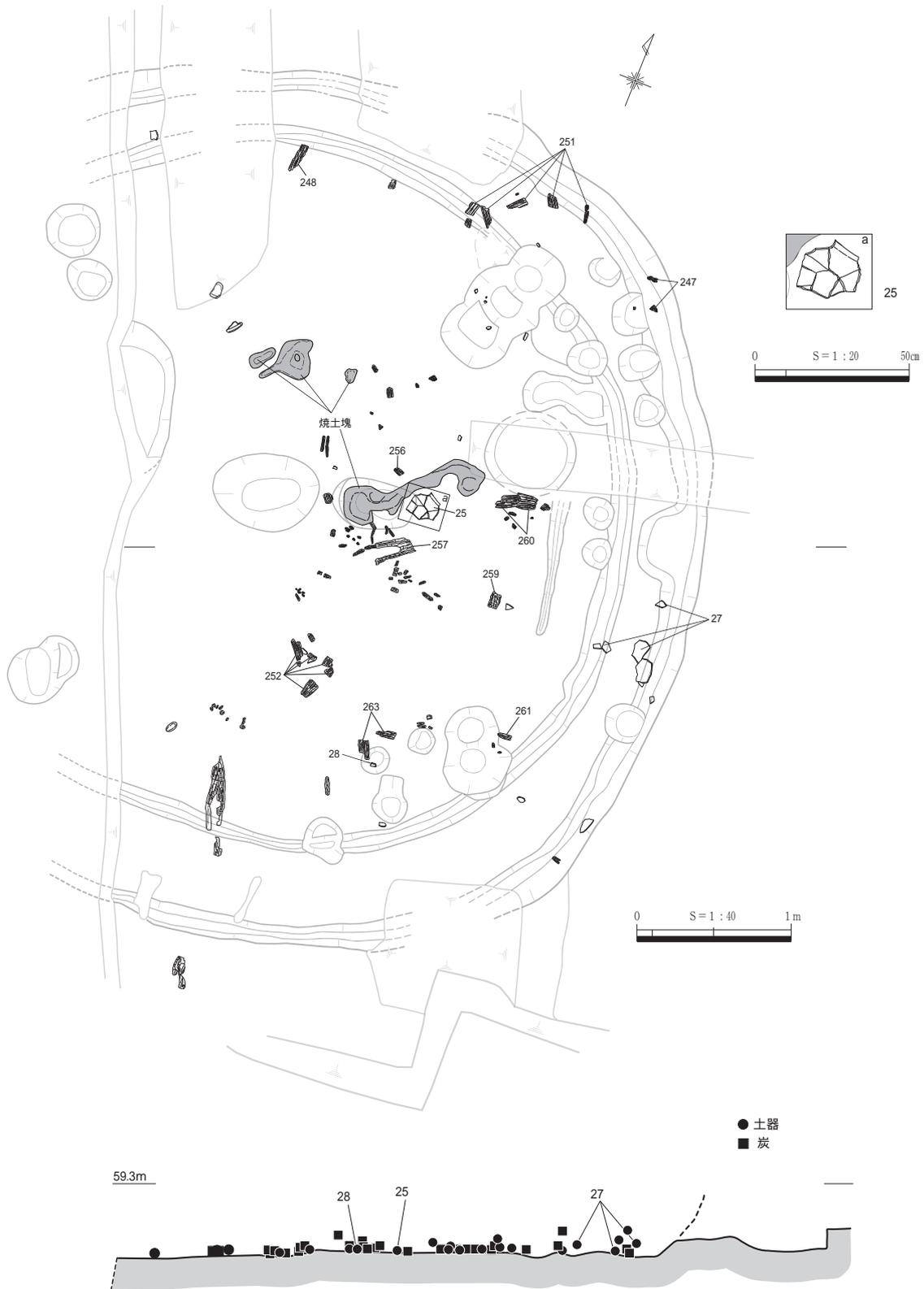
ピット番号	規模(長軸×短軸・深さ)cm	備考
P1-1	54×50-72	
P1-2	39×37-78	
P2-1	35×24-67	
P2-2	45×34-37	
P3	60×56-51	
P4	68×50-38	
P5	55×32-32	
P6-1	30×24-50	
P6-2	36×36-56	
P7	30×28-32	
P8	36×36-38	

### 第3章 調査の成果



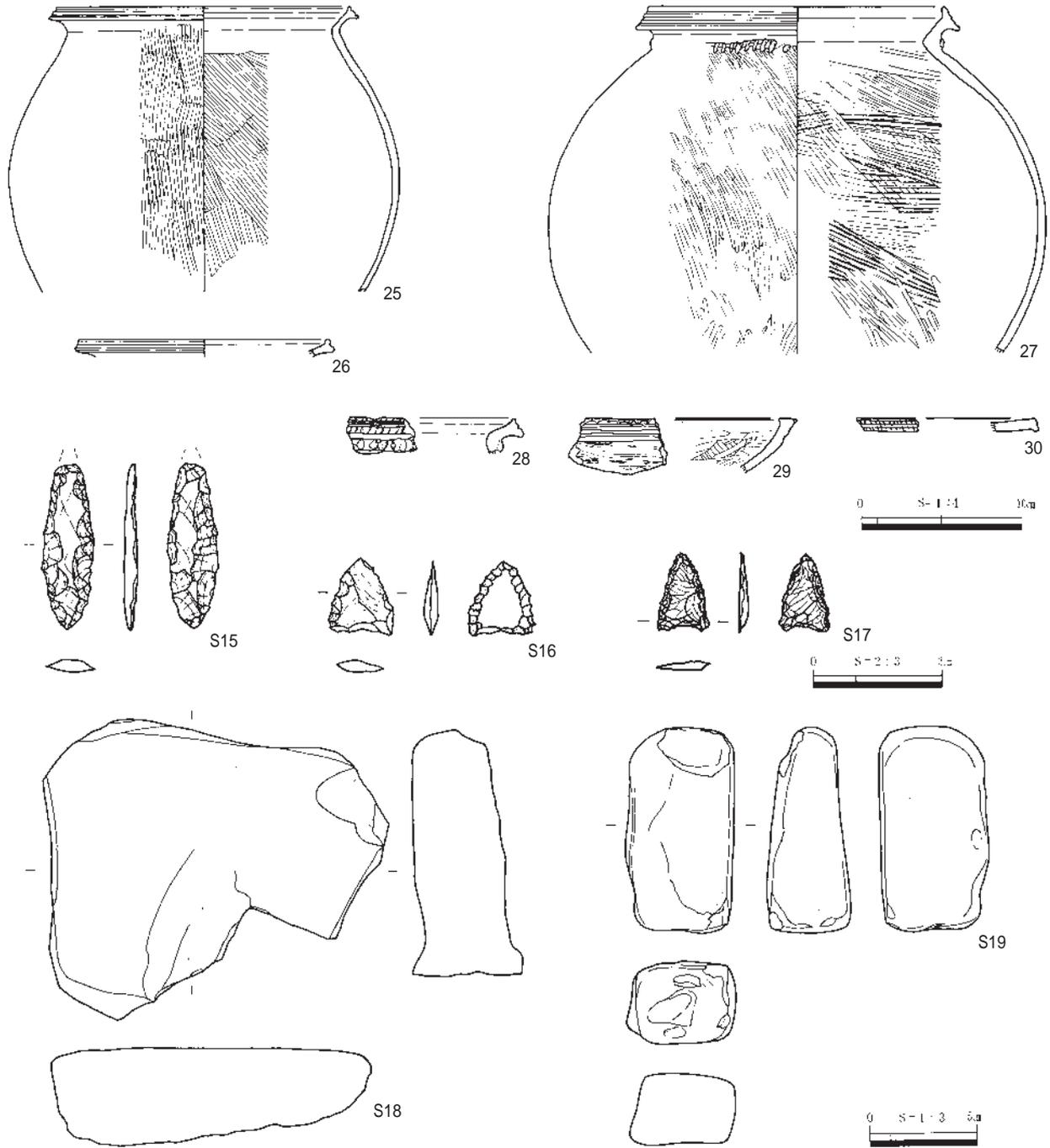
第37図 SI3(1)

粘性のやや弱い黒褐色土(1・3層)と、しまりのやや強いにぶい黄褐色土(2層)からなる。ハードロームのブロックを多く含み、表土との差も明瞭ではないことから、大部分が攪乱を受けた可能性が高い。柱穴の埋土をみると、P1-1の埋土は粘性がやや強い黄褐色土で、ホーキブロックを多く含んでお



第38図 SI3(2)

り、それを切る形でP1-2の黒褐色土が堆積している。同様に、P2-1の埋土である黄褐色土を切る形で、P2-2の黒褐色土が堆積している。すなわち、建て替えの際、古い柱穴を主にソフトローム土を用いて埋め戻した後、新たに掘削して柱を据えたものと考えられる。



第39図 SI3出土遺物

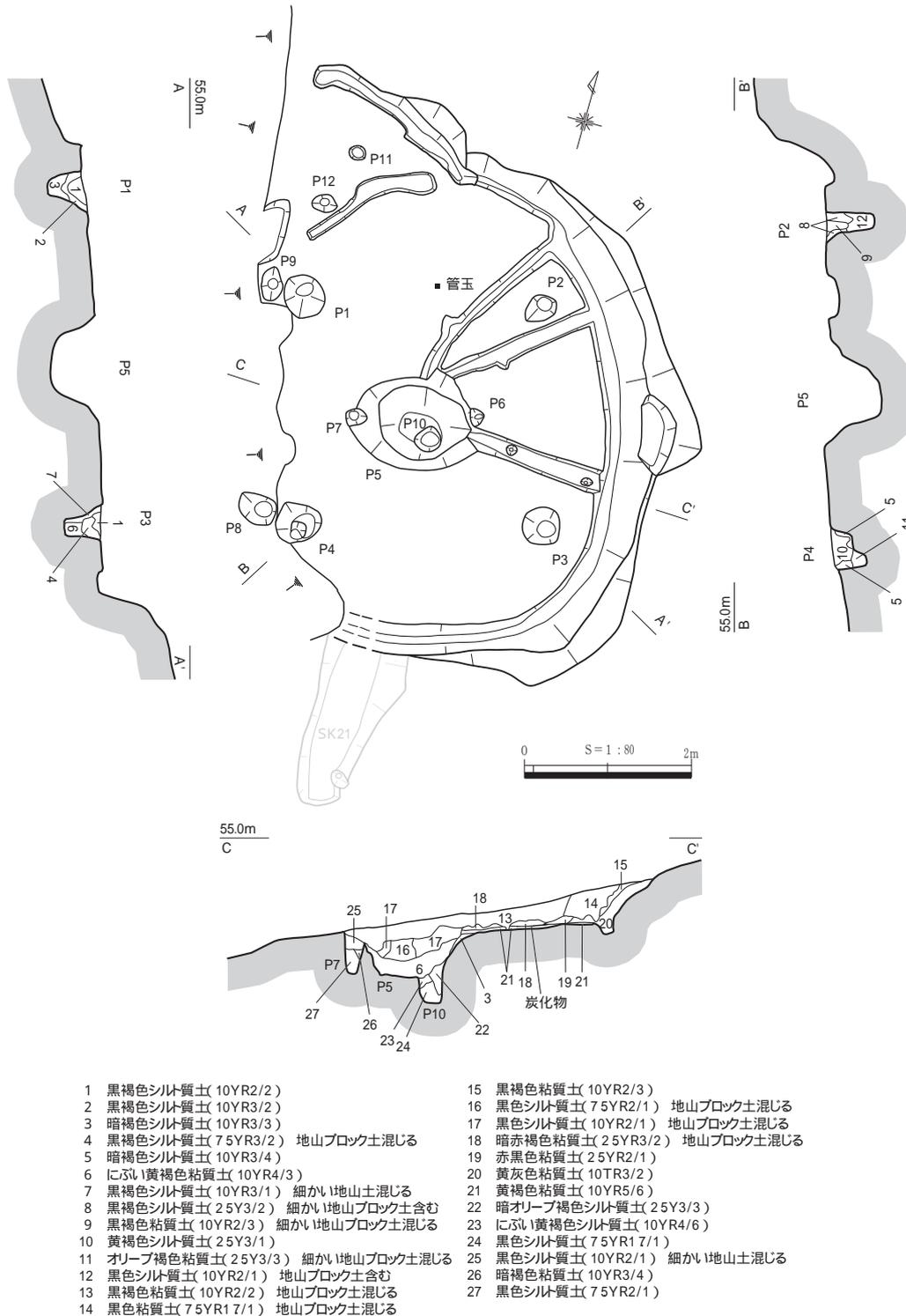
遺物は、埋土中および床面直上から弥生土器や石器が出土した。図化したもののうち、床面直上から甕27が出土したほかは、すべて埋土中からの出土である。25・26・28は甕および甕口縁片、29は高坏片、30は壺口縁部片である。S15～S19はいずれも安山岩製の石器であり、S15は柳葉形尖頭器、S16・S17は無斑晶安山岩製の石鏃である。S18は砥石で、表面中央部に溝状の使用痕が認められる。裏面は剥離し、ススが付着している。S19は磨石である。

出土土器は、清水編年 2・3 様式に相当することから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。炭化材の放射性炭素年代測定の結果、補正年代値で $2110 \pm 30\text{BP}$  (IAAA-103147)、 $2110 \pm 20$  (IAAA-103148)の年代値が得られた。この年代値は、土器型式と符合するものであると考える。

SI4(第40～42図、表4、PL.18・47・50・82・85・86)

2区南東側のG10グリッドにあり、標高53.6～54.8mの斜面部に立地する竪穴住居跡である。造成土除去後のソフトローム層上面で検出した。西側は流失しており、原形をとどめていない。東側0.3mには落とし穴SK4が隣接し、また、南側ではSK21を掘り込んでいることが判明した。

平面は楕円形を呈し、長軸6.1m、短軸4.9m以上を測り、深さは最も遺存状態のよい東壁で最大1.0



第40図 SI4

第3章 調査の成果

mを測る。床面積は、17.7㎡以上である。周壁に沿って幅10～25cm、深さ3～10cmを測る壁溝が巡っている。西側は流失しているが、全周していたものと考えられる。

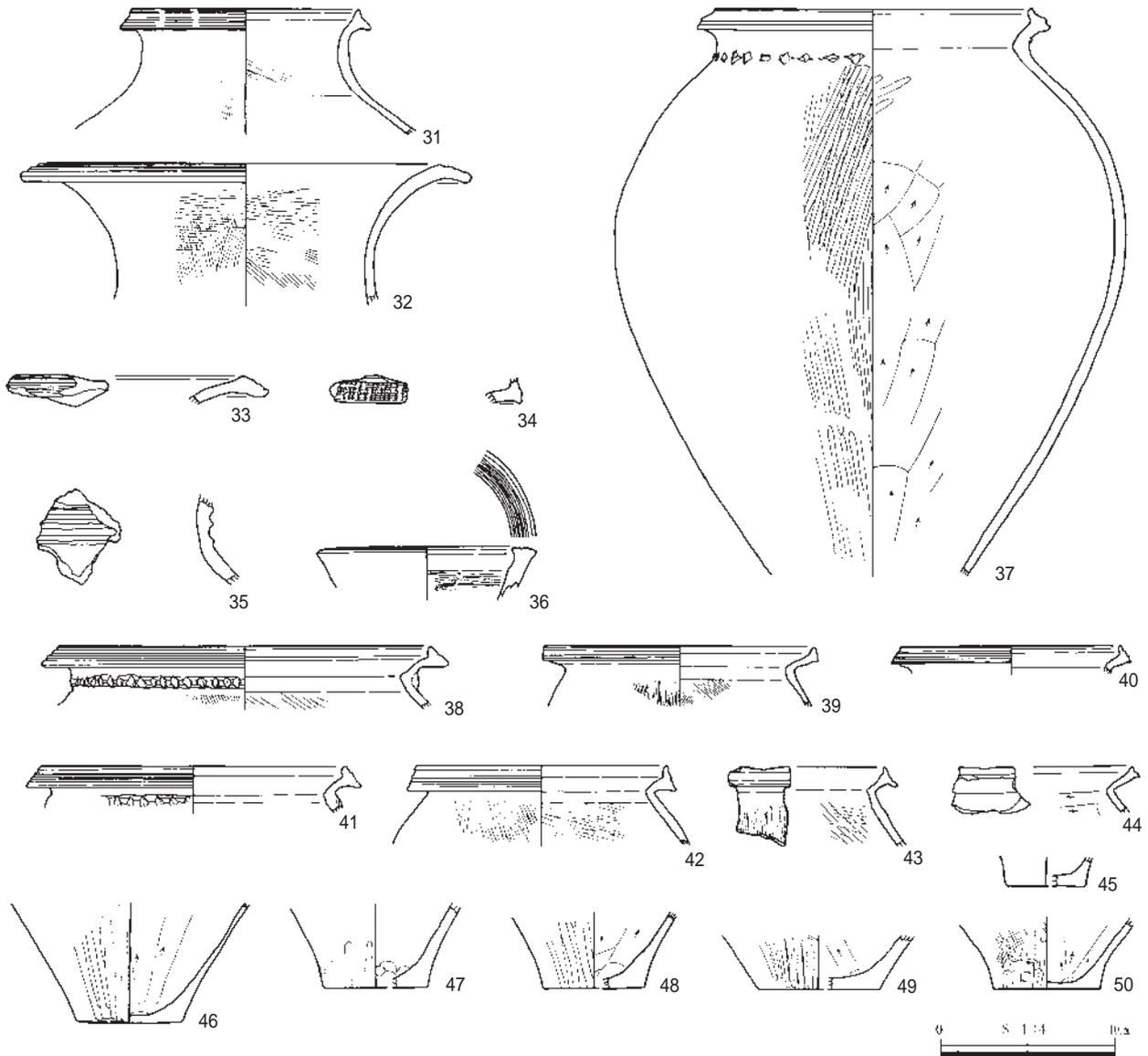
主柱穴はP1～P4の4基で、主柱穴間距離は、P1 - P2間から順に、2.9m、2.7m、2.9m、2.8mである。主柱穴以外に、P1・2に近接してP8・9がある。

住居中央には1.6×1.1(0.52)mを測る中央ピットP5がある。主柱穴に比べ規模が大きく、壁溝から延びる幅20～26cm、深さ4～6cmの3本の溝が接続している。この溝の底面

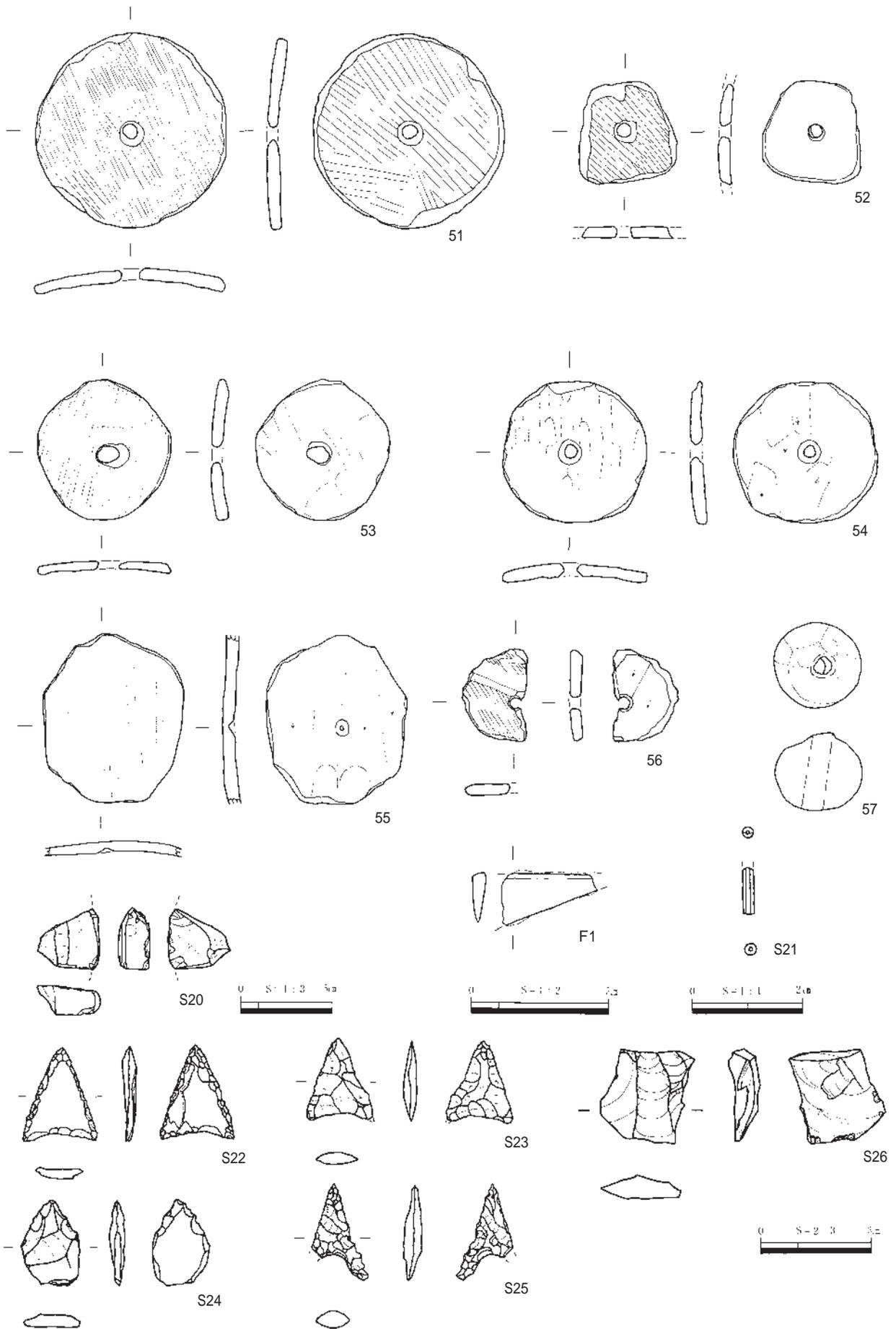
はいずれも中央ピットに向かって緩やかに傾斜している。また、P5の東西には、P6・7が接して

表4 SI4ピット一覧表

ピット番号	規模 長軸×短軸・深さ )cm	備考
P 1	53×46 - 48	主柱穴
P 2	40×32 - 57	主柱穴
P 3	48×46 - 44	主柱穴、柱痕(径20cm)
P 4	55×50 - 70	主柱穴、柱痕(径20cm)
P 5	160×110 - 52	中央ピット
P 6	21×16 - 42	棟持柱か
P 7	24×20 - 46	棟持柱か
P 8	47×35 - 74	
P 9	40×25 - 32	
P 10	30×27 - 85	P 5 以前
P 11	19×17 - 29	
P 12	30×23 - 24	



第41図 SI4出土遺物(1)



第42図 SI4出土遺物(2)